

氏名	高木彩也子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第3号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 フーゲー・ヴォルフの初期歌曲にみられるアーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットの影響 —— 1877年の支援に関する総合的考察 ——
学位論文等 審査委員	(演奏審査) 主査教授 大下久見子 副査教授 井上さつき 副査教授 村田四郎 副査教授 福本泰之 (論文審査 及び最終 試験) 主査教授 大下久見子 副査教授 井上さつき 副査教授 村田四郎 外部 審査員 教授 伊東信宏 (大阪大学教授)

### 学位論文の要旨

ドイツ・ロマン派歌曲の大家フーゲー・ヴォルフ Hugo Wolf (1860 - 1903) は、その悲劇的な生涯の裏で、良き支援者に恵まれた作曲家としても知られている。その支援は1877年に始まり、ヴォルフが1903年に亡くなるまで、計26年間、様々な人物によって途切れることなく行われている。支援の始まりとなった1877年当時、ヴォルフを援助していたのは、アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミット Adalbert von Goldschmidt (1848 - 1906) と彼の主催するサロンの参加者たちである。ゴルトシュミットは、銀行家から転身し作曲家としても活動していた人物であった。

ゴルトシュミットと深い関わりのあったこの1877年を挟み、ヴォルフ歌曲の作風には明らかに変化が生じている。翌1878年に作曲された歌曲には、それ以前の歌曲にはみられない複雑なヴァーグナー的手法が取り入れられており、この1877年に創作上の大きな転換点が生じていると指摘できる。この変化の要因の一つとして、1877年の支援を通し、ゴルトシュミットがヴォルフに何らかの音楽的影響を与えたのではないかと推測される。これまでのヴォルフ研究において、単なる支援者としてのゴルトシュミットの活動は評価されており、初期歌曲に関する研究も少なからず行われてきた。しかしながら、1877年と1878年の間に生じた作風の変化については特に取り上げられず、その変化の要因と考えられるゴルトシュミットとの関係性も指摘されてこなかった。ヴォルフとゴルトシュミットの音楽的な影響関係を明らかにするべく、両者の作品分析まで視野を広げた研究は行われていない。

本研究では、これらの問題点を踏まえ、1877年におけるゴルトシュミットの支援の実態を調査し、さらに両者の作品分析を行うことで、ヴォルフの初期歌曲にみられるゴルト

シュミットの影響を総合的に明らかにする。

第1章では、まず、支援者ゴルトシュミットの存在を歴史的に位置付けるため、ヴォルフの生涯における支援者たちについて、彼の音楽家としての生涯と支援者との関連という観点で概説した。ヴォルフが26年間に渡り受けた支援は、行った人物、期間、方法、など多種多様であり、支援者たちの存在が、ヴォルフが音楽家としての地位や独自の作風を確立していく上で欠かせないものであったことを確認した。さらに、ヴォルフの生涯全体の中で1877年の重要性を明示し、この年の支援者に着目する必要性を論じた。

第2章では、ゴルトシュミットによる1877年の支援の実態を明らかにした。第1節ではゴルトシュミットの支援活動を当時のウィーンの音楽生活の中に位置付けるため、19世紀ウィーンの文化的背景について概観した。19世紀のウィーンでは、音楽支援の担い手が従来の「貴族」から「市民」へと大きく転換したことにより、サロン文化が急速に発展し、その結果、ゴルトシュミットのようなユダヤ人銀行家のサロンを生み出した。こうした時代背景はヴォルフに対する支援と密接に関係しており、ヴォルフの参加したゴルトシュミットのサロンも、この中の一つと位置付けられた。続く第2節では、ヴォルフの書簡を通し、当時のゴルトシュミットを中心とする支援の実態を考察した。その結果、支援の内容は多面的であり、仕事の斡旋、演奏会への資金援助、さらには音楽界での人脈作りなど、従来の支援者の概念をはるかに超えるものであることが判明した。さらに書簡の記述から、この年にヴォルフがゴルトシュミットのアラトリオ《七つの大罪 Die sieben Todsünden》の校正の仕事を担当していたという事実が浮上した。このことはゴルトシュミットの支援に音楽的側面が存在した、という可能性を示唆するものであり、この作品を通じた一連の体験は、単なる金銭を得るためだけのものでなく、1878年のヴォルフの作風変化に何らかの音楽的影響を及ぼすものであったと推測できる。

第3章では、1877年と1878年の間にみられるヴォルフ歌曲の作風変化と、その背景にあるゴルトシュミットの影響を明らかにするため作品分析を行った。1878年に新たにみられた音楽的特徴がヴァーグナー的手法と類似することから、まず先行研究をもとに、これまで一般的に言われてきたヴォルフ歌曲にみられるヴァーグナーの影響を考察し、音楽的特徴を集約した。それらの音楽的特徴をもとに5つの分析項目（半音階的旋律、同じ旋律型の反復、朗唱的な旋律、モチーフの発展的的反復、絶え間ない転調）を設定し、それらを基に1877年～1878年におけるヴォルフ歌曲及びゴルトシュミットの《七つの大罪》の音楽的特徴を比較した。その結果、以下の点が明らかとなった。

まず、1877年と1878年のヴォルフ歌曲に5つの音楽的特徴が該当するかを精査し、特徴の分布を考察した。その結果、特徴の分布傾向が明らかに異なっており、この時期に創作上の変化が生じたことが確認できた。加えて、これらの音楽的特徴は《メーリケ歌曲集》以降は全体的に該当するものの、1878年においては分布が疎らであり、習作的な傾向が強いと指摘できた。そのため1877年の創作上の大きな転換点が、これまで見過ごされてきたと考えられる。

また、1878年のヴォルフ歌曲と《七つの大罪》には、共通して上記に挙げた分析項目5つの音楽的特徴が該当した。両者に共通してみられる音楽的特徴はヴァーグナー的手法と類似しているが、この中でも歌唱旋律における「同じ旋律型の反復」は、《七つの大罪》

において特に多くみられた特徴であった。歌唱旋律において、詩の内容に即し、頻繁に同じ旋律型を反復させる手法はゴルトシュミットの特色である。また同様に、1878年のヴォルフ歌曲においても最も多くみられ、これ以後、ヴォルフは詩を表現する手段として、歌唱旋律にこの手法を多用している。つまりこの特徴を含む以上の5つの音楽的特徴は、ヴァーグナー的であるとはいえ、ゴルトシュミットを介して得たものである可能性が高いと考えられるのである。

以上の研究結果を総括すると、本論文の結論は次のとおりである。1877年におけるゴルトシュミットの支援は、いわゆる「パトロン」という従来の支援者の概念を超えた極めて多面的なものであり、ヴォルフが音楽家として歩む礎を築いたと評価できる。さらにゴルトシュミットの《七つの大罪》及び、1878年のヴォルフ歌曲双方の音楽的特徴に多くの共通点が見出されたことから、1877年におけるゴルトシュミットの一連の支援と、同時期に生じたヴォルフの創作上の変化には、密接な関連性があると考えられる。つまり、定説となっているヴォルフ歌曲におけるヴァーグナーの影響について、その一部がゴルトシュミットを介して受けたものだったことを指摘できるのではないだろうか。ヴォルフの歌曲作曲家としての才能は、ゴルトシュミットを通して新たな音楽的影響を得ることで、更なる進化を遂げたと言えるだろう。これらの点から、ゴルトシュミットは、単なるパトロンの支援を与えたに留まらず、音楽面でもヴォルフ独自の作風が確立する上で影響を与えた可能性が高いと結論づけられる。

#### 演奏審査結果の要旨

演奏に先立ち、演奏曲目と選曲意図について申請者本人から簡潔な説明がなされたことは、演奏者がなぜこのプログラミングにこだわったかを理解するに十分なものであり、かつ優れた内容であった。

前半のプログラム、G. F. Händel、J. Haydn はやや緊張をかくし切れなかったものの、古典派の演奏様式を的確にとらえた演奏であった。

H. Pfitzner の作品では重厚なピアノ・パート部分と声の音色とにいささか違和感があったが、ドイツ語のニュアンスと表現力で歌いきった。

圧巻なのは後半のプログラム、申請者自身の研究テーマでもある H. Wolf の作品を3人の詩人～E. Mörike, J. v. Eichendorff, J. W. v. Goethe～より抜粋し演奏されたドイツリートである。

これら11曲の作品は H. Wolf 円熟期の作品であり、ドイツ歌曲の大家の一人であることを示す素晴らしい声楽作品ばかりで、それぞれの歌曲の違いと変化を見事に歌いきり、演奏家としての将来を彷彿とさせた。

中でも Eichendorff の“Nachtzauber”「夜の魔法」のピアノと声の織り成す音色の密やかな世界観、“Verschwiegene Liebe”「秘かな愛」の mezza voce に表現される柔らかな声質など、美の表現に徹底していたことは印象深い。

この演奏は声楽家としての技術と感性に裏打ちされた見事なものであり、ドイツ語のディクションももちろんのこと、作品への深い理解力を備え、特徴を的確に捉えたものであり、その演奏は完成度も高く、曲が進むにつれ聴衆を魅了した。

実技系博士課程学位リサイタルにふさわしい、立派な演奏会であった。

### 論文審査結果の要旨

本論文は、19世紀後半に活躍したH. ヴォルフ (1860-1903) の創作について、特に初期歌曲時代の発展と、それを支えたパトロンの一人、A. v. ゴルトシュミットとの交流と影響という観点から見直そうとしたものである。全体として、先行研究を丁寧におさえ、ヴォルフの書簡を読み解きながら、ゴルトシュミットとの関係を明らかにし、彼の『七つの大罪』を検討してヴォルフへの影響について考えるなど、労作である。

審査会での質問とコメントとして：第二章第一節の「文化的背景に」の記述の中で、1877-1878 の状況について焦点がまだ充分絞り込めていない。また第二章のなかで、ヴォルフにおけるワーグナー的手法がゴルトシュミットを介して受け取られたものだ、という主張の根拠がはっきりしない。ゴルトシュミットの特徴にあつて、ワーグナーにはないものをヴォルフが受け継いでいる、ということ述べる必要がある。特にヴォルフが再びウィーンに戻ってからも、モットル (コレペティを経てワーグナー作品を振る指揮者でもあった) のもとでのコレペティの修業などで培った楽曲の分析力や音楽的訓練の積み上げの実績からの影響もひとつの要因となっているという可能性もある。

さらに言えばヴォルフの歌曲が歌われたサロンの環境をもっと具体的に再構成しても良かったのではないか。

以上のことを踏まえても、従来ひとくくりに扱われてきたヴォルフの初期歌曲の中で1877年と1878年の間に作風の変化が認められることを指摘した点、その変化と支援者ゴルトシュミットとの関係を多面的に明らかにしようと試みた意欲的な作品であり、その観点は独創的である。

この論文はたんなる支援者にとどまらず、音楽的な部分でも深い影響力のあったヴォルフとゴルトシュミットとの関係が浮き彫りにされるという意味で、大変貴重な論文として評価するものである。

### 最終試験結果の要旨

最終試験では、学位申請リサイタルと論文の評価について確認を行った。

申請リサイタルでは、申請者の研究テーマであるヴォルフの円熟期の作品を中心に行った。豊かな感性と確かな技術に裏打ちされた美しいソプラノを惜しみなく発揮できるプログラミングであった。ヴォルフの変化に富んだ声楽作品の演奏は時を追うごとに聴衆を魅了した見事な演奏であった。以上のことを高く評価することを改めて確認した。

申請論文では、ヴォルフの初期歌曲1877年と1878年との間に明確な作風の違いを見出し、その背後に支援者であり作曲家であったゴルトシュミットの存在が大きく関わったという観点が独創的であり、オラトリオ<七つの大罪>に着目した点も含めヴォルフ研究に一定の寄与を行ったことを確認した。

実技系博士後期課程に於いて行ったこれらの研究をさらに深め、研究者としてまた演奏家として社会に貢献できる人材であることを確認した。

審査員全員一致で優秀な成績と認め合格と判定した。